

未来への伝承

弥生時代の石器

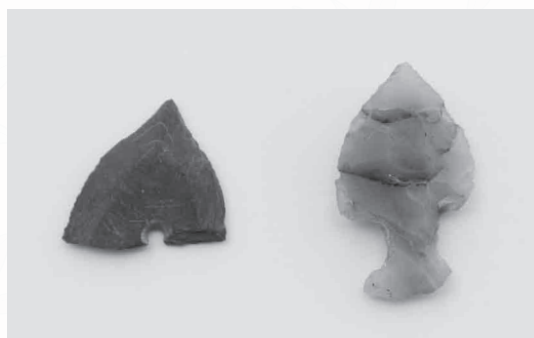
— 変わった形の2つの石鏃 —

せきぞく

弥生時代の石鏃(石の矢じり)と聞いて、不思議に思うかもしれません。石鏃は、弓矢の先端に取り付けるもので、狩猟が盛んであった縄文時代を代表する道具のひとつです。次の弥生時代になっても、タンパク源確保のため弓矢によるシカやイノシシ猟は行われていました。稲作を中心とした農耕社会のイメージが強い弥生時代ですが、引き続き狩猟は行われ、石鏃が使われていたのです。西日本では、弥生時代中頃から大型化し、狩りの道具から武器として使われるようになります。ムラ同士の争いが行われるようになった頃です。

土浦市周辺でも、縄文時代ほど多くはありませんが、弥生時代の石鏃が発見されています。ほとんどは写真②のように縄文時代と同じ形ですが、弥生時代になって出現した独特な形の石鏃も発見されています。

今回は、弥生時代に使われた特徴的な石鏃である磨製石鏃と、アメリカ式石鏃を紹介いたします。



▲写真① 磨製石鏃とアメリカ式石鏃

写真①左は、板谷地区にある東山団地遺跡から発見された磨製石鏃です。ほとんどの石鏃は打ち欠いて作る打製石鏃ですが、この石鏃は丁寧に磨いて薄く仕上げられています。このことから磨製石鏃と呼ばれています。弥生時代の初めから中頃にかけて使われ、関東地方より西の地域で多く発見されています。

関東地方や中部地方の磨製石鏃は、弥生時代中頃に使われました。長さは1.5〜4センチ程度、形は三角形か五角形で、茎はありません。小さな孔がつけられているのがこの地域の特徴で、柄に装着するためのものと思われる。

東山団地遺跡の磨製石鏃は、弥生時代中頃の竪穴建物跡から発見されました。粘板岩で

作られ、一部欠損していますが五角形に近い三角形と思われる。大きさは幅1.9センチ、厚さ1.5ミリと小型のもので、

現在、県内で確認されている磨製石鏃は、本例とかすみがうら市下志筑で発見された2点のみで、極めて貴重な資料といえます。

写真①右のアメリカ式石鏃は、紫ヶ丘地区にある原田北遺跡から発見されました。基部にみられるT字型の茎が特徴です。北アメリカの先住民が使用していた石器に似ていることから、アメリカ式石鏃と呼ばれています。分布は北関東や新潟県、東北地方に集中しています。県内では那珂川や久慈川流域を中心に、弥生時代終わり頃の約20の遺跡から発見されています。

狩猟具として使用されたと思われるですが、貴重品であるガラス玉と一緒に出土することがあるので、権威や地位を示す威信財としても使われたという説があります。

現在、市内で確認されているのは本例のみで、土坑と呼ばれる人為的に掘られた穴から発見されました。チャート製で、長さ約2.6センチ、厚さ0.5センチの大きさです。同じ土坑から、茎のない石鏃も2点出土しました(写真②)。この土坑は、形などからお墓の可能性が考えられています。

今回紹介した2つの石鏃は、上高津貝塚ふるさと歴史の広場で開催している夏休みファミリーミュージアムのテーマ展、「石の道具の発達史・人と石の三万年」のなかで、8月30日まで展示しています。ぜひご覧ください。

問上高津貝塚ふるさと歴史の広場

(☎) 826・7111



▲写真②

アメリカ式石鏃と同じ土坑から出土した石鏃